I 主題について

1 研究の背景

(1) 今日的教育の課題

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す「知識基盤社会」の時代だと言われている。この「知識基盤社会」においては「課題を見い出し解決する力」、「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」、「他者や社会、自然や環境と共に生きること」など、変化に対応するための能力が求められている。このような時代を担う子どもたちに必要な能力こそ「生きる力」であり、現行の学習指導要領においても、その理念が重視されている。さらに、学力の3つの重要な要素として、「基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせること」「知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育むこと」「学習に取り組む意欲を養うこと」が掲げられている。また、国内外の学力検査の結果から、基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成が大きな課題となっている。このような課題を解決するために、学習指導要領には、各教科にかかわる言語活動が例示され、重要な指導内容改善の視点となっている。

このように、各教科で言語に関する能力を育成する際に、その中核となるのは国語科である。国語科では、実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けるよう指導することが強く求められている。

(2) 子どもの実態

本校の子どもは、授業中も教師の話をよく聞いて、指示されたことを確実に行うことができる素直な子が多い。一方で、朝の元気のよいあいさつや、感謝の気持ちを伝える表現など、自分の気持ちを適切に表現して相手に伝えることを苦手としている子どもが多い。要因としては、自分の考えに自信がもてなかったり、伝えることの楽しさを実感できていなかったりすることが考えられる。また、鹿児島学習定着度調査(表1)等の諸学力検査の結果から、他教科に比べて国語の平均通過率が低いことが分かった。

	围	語	社	会	算	数	理	科
	通過率	県比(+)	通過率	県比(+)	通過率	県比(+)	通過率	県比(+)
H 2 5	72.2	4. 9	8 1 . 7	10.8	7 1 . 5	7. 5	82.0	8. 7
H 2 6	59.6	-2.5	70.5	9. 9	55.1	1. 1	70.7	6.8

【表1:鹿児島学習定着度調査】

	国 語			算 数				
	A(基礎	·基本)	В (%	5用)	A(基礎	·基本)	В (%	5用)
	通過率	全国比	通過率	全国比	通過率	全国比	通過率	全国比
H 2 5	7 2 . 0	9. 3	51.7	2. 3	85.7	8. 5	64.9	6. 5
H 2 6	74.5	1. 6	57.0	1. 5	82.4	4. 3	60.4	2. 2

【表 2 : 全国学力·学習状況調査】

さらに、全国学力学習状況調査(表 2)の結果から、主として「活用」に関する問題については、国語・算数ともに全国を上回っているものの、主として「知識」に関する問題に比べ低いものとなっている。それは、「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力にかかわる内容」や「様々な課題解決のための構想を立て、実践し、評価・改善する力にかかわる内容」に関しての平均通過率が全国平均を下回っていることなどが、その要因として考えられ、いわゆる活用する力の育成が大きな課題として明らかになった。これまでの授業を振り返ると、教材文の読み取りと言語活動が結び付いておらず、「なぜ」「何のために」この学習をするのか分からないために、主体的な学習が展開できていなかったことが考えられる。

そこで、国語科の授業を中心として、子ども一人一人が自らの課題に対して、課題解決までの見通しを明確にもち、習得した知識・技能を活用しながら、主体的に解決していけるような授業を展開する必要がある。

そのためには、教師が教えるべき指導事項と子どもが学びたいと思うような単元 を通した言語活動とを結び付けて、授業を展開していく必要があると考える。この ような学習活動を通して、子どもは、習得した知識や技能を様々な場面で主体的に 考え、表現していくことで活用する力が育成されると考える。

(3) 教師と子どもの願い

国語科の指導で身に付けた力を生かして、「自分の思いを自分のことばで表現し伝えられる力を付けさせたい。」「インターネットや図書資料を使って調べ学習をした際に、丸写しをせず見つけた情報を要約し、自分の言葉でまとめられるようになってほしい。」「将来、社会人として言葉による的確なコミュニケーションができるような人になってほしい。」ということを意識し、日々の授業に臨んでいる。

子どもたちの国語科に対する意識調査から、「分かるようになりたい。」「できるようになりたい。」という思いをもっていることが分かった。また、「自分の思いをうまく伝える言葉や表現方法について学びたい。」「日記や作文を上手に書けるようになりたい。」等の願いを抱いていることから、子どもたちの思いや願いをさらに高めるために、めあてをもって粘り強く課題に取り組ませる関わりを重視したり、読解力及び語彙力の育成、論理的な表現力の育成、読書環境の整備をしたりすることが求められている。

そこで、上記の「教えるべきこと」が子どもの「学びたいこと」になるような授業を展開し、教材を使って確かな読みの力を高めることで、子どもたちが「国語の授業が大好き。」「自分の考えや思いを誰かに伝えたい。」と感じ、主体的に表現する子どもを育成できるようになると考えた。

2 研究の方向

(1) 目指す子ども像

本校の国語科研究における目指す子ども像は、以下の通りである。

- 読み取ったことと関連付けて、自分の意見や考えを書くことができる子ども
- 相手の考えと自分の考えを比べながら聞くことができる子ども
- 自分の考えを進んで表現し、相手のよさを取り入れながら、考えをまとめることがで きる子ども
- 多くの語彙を使い、構成を工夫しながら自分の考えを表現することができる子ども
- 言葉のおもしろさや本から学ぶ知恵の奥深さを知り、進んで読書に親しむ子ども

(2) 目指す授業像

目指す子ども像を具現化するために、3つの「学び」をつなぐことに重点を置きながら、次のような国語科授業を構想した。

3つの「学び」を重点化した目指す授業像



指導事項や言語活動の系統を明らかにして、6か年を通した「学び」の系統性を重視する。



子どもが主体的に学習できるように、「やってみたい!」「おもしろい!」といった意識を喚起させる単元全体においての課題を設定し、単元全体を通した「学び」の継続を重視する。



子どもたちが広げ・深め・高めあえるような 相互に影響し合う関係を大切にした交流活動を 展開し、子ども同士の「学び」合いを重視する。



- ・ 単元を通した言語活動を意識して本時の学習に取り組ませるために、言語活動のモデルや学習計画表を提示する。
- 子どもの課題意識を明確にするために、子どもの言葉をもとにめあてを設定する。

しらべる

- ・ 見通しをもって主体的に学習させるために、学習の進め方を確認させる。
- ・ 教材文の内容を理解させるために、学習範囲を音読させたり、読み取ったことにサイドラインを引かせたりする。

ふかめる

- 自分の考えを整理したり明確にしたりするために、ノートやワークシートに自分の考えを記入させる。
- ・ 自分の考えを深めさせるために、ペアやグループで自分の考えを交流させる。

ふりかえる いかす

- ・ 交流したことのよさを実感させるために、交流を通して気付いた考えの 相違点等を振り返らせる。
- ・ 本時の学習と単元を通した言語活動のつながりを意識させるために、子 どもの言葉をもとにしてまとめをさせる。

以上のような「目指す子ども像」「目指す授業像」を受けて、次のような研究主題を設定した。

【研究主題】

確かな読みをもとに、主体的に表現する力を育てる国語科指導法の研究 ~「学び」をつなぐ言語活動を通して~

Ⅱ 研究の内容

1 研究主題

(1) 「確かな読み」とは

目的をもって文章を読み、読 み取った叙述(情報)から自分の 考えを形成することであるとと らえている。

(2) 「主体的に表現する」とは

読み取った叙述(情報)を基 に形成した自分の考えを,相手 意識をもち,目的や意図,場面 や状況などに応じて,意欲的に 伝え合うことととらえている。



【図 1:研究主題のイメージ】

2 研究の仮説と内容

研究主題を具現化していくために,次の2つの仮説を設定した。それぞれに,具体的な取組を位置付けた。

(1) 仮説 1

指導事項や言語活動の系統性を明らかにし、子どもの実態に応じて位置付けた 指導計画を作成し実践すれば、単元を通した言語活動を充実させることができ、 子ども一人一人の読みが確かなものになり、主体的に表現する子どもを育てるこ とができるのではないか。

【具体的な取組】

- プランニングシートを作成して活用を図る。
- 発達の段階に応じた交流活動を設定する。
- 言語活動のモデルを作成して活用を図る。

(2) 仮説 2

言葉への興味・関心を高められるような言語環境を整えれば、確かな語彙力や 豊かな言語感覚を育成することができ、子ども一人一人の読みが確かなものにな り、主体的に表現する子どもを育てることができるのではないか。

【具体的な取組】

- ノート指導の充実を図る。
- 教室内外における言語環境を整備する。
- 語彙表を作成して活用を図る。

研究の全体構想

【学校教育日標】

自ら学ぶ意欲と実践力をもち、心豊かでたくましく生きる子どもの育成 「明るい子ども」「考える子ども」「がんばる子ども」

【子どもの実態】

- 授業中も教師の話をよく聞いて、指示されたこ とを確実に行うことができる。
- 自分の気持ちを適切に表現して相手に伝えるこ とを苦手としている。
- 他教科に比べて国語の平均通過率が低い。
- 「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用す る力にかかわる内容」などの平均通過率が全国平 均を下回り,活用する力の育成が大きな課題。

【今日的教育の課題】

- 「課題を見い出し解決する力」, 「知識・技 能の更新のための生涯にわたる学習」, 「他者 や社会, 自然や環境と共に生きること」など, 変化に対応するための能力の育成が必要。
- 基礎的な知識及び技能を活用して課題を解決 するために必要な思考力・判断力・表現力等の 育成が必要。

【教師の願い】

- 自分の思いを自分のことばで表現し伝えられる 力を付けさせたい。
- インターネットや図書資料を使って調べ学習を した際に, 丸写しをせず見つけた情報を要約し, 自分の言葉でまとめられるようになってほしい。

【子どもの願い】

- 分かるようになりたい。できるようになりたい。
- 自分の思いをうまく伝える言葉や表現方法に ついて学びたい。
- 日記や作文を上手に書けるようになりたい。

【目指す子ども像】

- 読み取ったことと関連付けて、自分の意見や考えを書くことができる子ども
- 相手の考えと自分の考えを比べながら聞くことができる子ども
- 自分の考えを進んで表現し、相手のよさを取り入れながら、考えをまとめることができる子ども
- 多くの語彙を使い、構成を工夫しながら自分の考えを表現することができる子ども
- 言葉のおもしろさや本から学ぶ知恵の奥深さを知り、進んで読書に親しむ子ども

【研究主題】

確かな読みをもとに、主体的に表現する力を育てる国語科指導法の研究 ~「学び」をつなぐ言語活動を通して~

【研究仮説1】

指導事項や言語活動の系統性を明らかにし,子 どもの実態に応じて位置付けた指導計画を作成し「環境を整えれば、確かな語彙力や豊かな言語感 実践すれば、単元を通した言語活動を充実させる ■覚を育成することができ、子ども一人一人の読 ことができ、子ども一人一人の読みが確かなものに みが確かなものになり、主体的に表現する子ど なり、主体的に表現する子どもを育てることができる┃もを育てることができるのではないか。 のではないか。

【研究仮説2】

言葉への興味・関心を高められるような言語

視点1 言語活動の充実

- プランニングシートの作成と活用
- 発達の段階に応じた交流活動の設定
- 言語活動のモデル作成と活用

視点2 言語環境の整備

- ノート指導の充実
- 教室内外における言語環境の整備
- 語彙表の作成と活用

Ⅲ 研究の実際

- 1 仮説1に関する主な取組
- (1) プランニングシートの作成と活用

ア 基本的な考え方

国語科では、言語活動を通して子どもたちに指導事項を身に付けさせることが大切である。しかし、指導をしていく中で、言語活動を行うことだけに意識が向いてしまい、一体どのような国語の知識・技能を子どもたちに身に付けさせたのかが曖昧なまま授業を展開してしまうことがあった。そこで、本校では、教師が、指導事項をしっかりと意識して指導できるようにするために、単元毎の指導事項と言語活動を明確にし、指導計画にしっかりと位置付けた「プランニングシート」を作成して授業に臨むようにした。子どもたちが、これまでに身に付けてきた力と、新たに身に付けさせたり高めたりする力を確認することによって、指導事項の系統性を意識した指導を目指している。

イ プラニングシート作成の手順

プランニングシートを作成するにあたっては、本校が独自に作成した重点指導事項の系統表(図2)を活用し、以下の流れで作成を行った。

Ŧī.

年

六

年

① 単元で指導する「領域」と 「指導事項」を決める。



② 「身に付けさせる力」の項目に,指導事項を具体的な子どもの姿で明記する。



③ 指導事項を身に付けるのに ふさわしい言語活動を設定 し、活動内容を明記する。



④ 単元の指導時間を,第一次,第二次,第三次に分けた単元の指導計画を明記する。

ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、 意見などとの関係を押さえ、自分の考え を明確にしながら読んだりすること。

- 要旨(生き物は円柱形)
- ・ 話題,事例と理由や根拠,文章構成,巧みな叙述(機力のスイッチを入れよう)
- ・ 自分のものの見方や経験,立場と 関係付ける(生き物は円柱形)
- ・ 筆者の意図や思考(天気を予想する)
- 自分の考えをまとめる (生き物は円柱形, 天気を予想する, 想像力のスイッチを入れよう)
- ・ 自分の知識や経験,立場と関係付ける(時計の時間と心の時間,自然に学ぶ暮らし)
- ・ 筆者の主張とその根拠 (自然に学ぶ暮らし、鳥獣戯画を読む)

【図2: 重点指導事項の系統表抜粋】

ウ プランニングシートの活用と見直し

作成したプランニングシートは、学年毎にファイルに綴じている。教師は、それらを参考にして授業計画を立てたり、指導を行ったりしている。プランニングシートは、より子どもの実態に応じたものにするために、学期毎に学年で見直しをしている。また、見直しの際は、プランニングシートをまだ作成していない領域や単元を確認し、新規に作成している。

(※ プランニングシート及び重点指導事項の系統表については、別冊資料に掲載)

(2) 発達の段階に応じた交流活動の設定

ア 「交流活動」についての基本的な考え方

本校では、単元を通して言語活動を充実させるためには、子どもの主体的・協働的な学習を促すことにつながる交流活動を充実させる必要があると考える。

そのためには、まず、互いに尊重できる人間関係が重要である。そして、子どもが複数の関係の中で、音声または文字によって自分の考えを発信・受信し合うようにする。その際には、目的意識や相手意識も含めた個々の課題意識がはっきりしていなければならない。(主体性) さらに、伝え合いの中でやりとりされる内容や他者との関わりなどについて自己評価する場面を設ける。(協働性)

また、学習計画を検討する際には、以下の視点で交流活動を位置付けられるようにし、自己評価の視点を明確にしている。自己評価させる際に、低学年では、教師が自己評価の視点を示し、教師主導で振り返らせる。中学年では、教師が自己評価の視点を示し、子ども主体で振り返らせる。高学年では、本時の「交流活動」の目的に応じて、子どもが主体となって振り返りができるよう留意している。

視点1「相手を尊重している交流」

- ○相手の話を最後まで聞いているか
- ○相手の話を受け止めてから聞いているか
- ○相手のよさを見つけようとしているか
- ○言葉遣いに気をつけているか

視点2「目標を明確にもっている交流」

- ○自分の考えを広げようとしているか
- ○情報を集めようとしているか
- ○自分の考えと比べようとしているか
- ○新たな情報を得ようとしているか

視点3「自分自身の考え方に生かそうとしている交流」

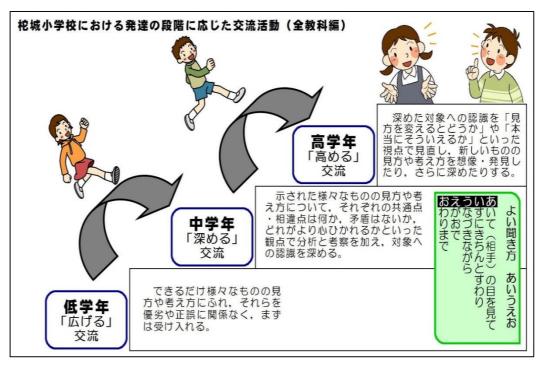
○自分の考え方に変容があったか

○相手に、自分の変容を伝えようとしているか

視点4「自分たちで、新しい考えを作ろうとする交流」

○協力しながら、新しい方法や新しい考え方を創ることができたか

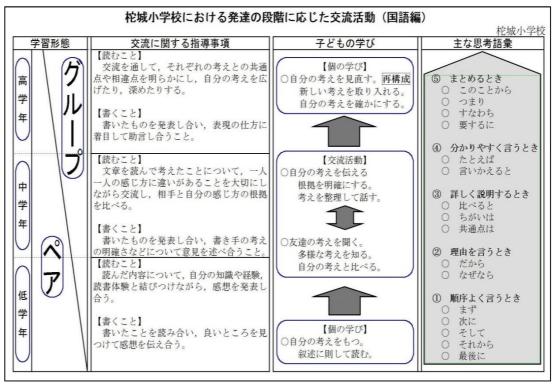
イ 発達の段階に応じた「交流活動」



【図3:発達の段階における「交流活動」(全教科編)】

本校では、6か年を見据えた「交流活動」を行う際、系統的な指導により、より効果を高めることができるように、全教科等において、子どもの発達の段階を踏まえ、子どもの思考を低学年では「広げる」、中学年では「深める」、高学年では「高める」ことを意識して、「交流活動」を設定できるように留意している。特に、低学年においては、「交流活動」の土台となる傾聴の姿勢を育てるために、「よい聞き方あいうえお」を徹底することで、多様な意見を引き出せる雰囲気づくりを大切にしている。(図3)

国語科においては、学習指導要領解説国語編の交流に関する指導事項を子どもに身に付けさせるために、低学年では、特にペアでの活動を重視し、高学年に上がるにつれて、グループでの交流(4人1組が基本)を増やしている。また、子ども一人一人が自分の考えを明確にもってから交流することを大切にし、友達の考えと自分の考えを比較したり、根拠を明確にして自分の考えを相手に伝えたりして、自分の考えを再構成できるような活動を行わせている。その際、自分なりの考えを整理する手だてとして、図4に示すような主な思考語彙を提示している。



【図4:発達の段階における「交流活動」(国語編)】

(3) 言語活動のモデル作成と活用(第6学年実践例「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」)

ア 基本的な考え方

全国学力・学習状況調査や鹿児島学習定着度調査における問題では、さまざまな意見から練り上げていく段階での問題や表現の効果や構成のよさを問う問題が多く出されている。それは、教師から「こう書きなさい。」と言うのではなく、子どもたち自身で表現の効果や説得力のある文章を書く必要性に気付き、「何を」「どのように書くべきか」を考えていくような授業展開が求められていることを示している。

そこで、本校では、言語活動のモデルを活用することで、子どもたちが自ら表現の効果や説得力のある文章を書く必要性やそのポイントに気付き、生かそうとすることができると考えた。そのモデルを提示する際は、指導事項や発達の段階に応じたバッドモデル、グッドモデルを活用して、授業実践を行っている。

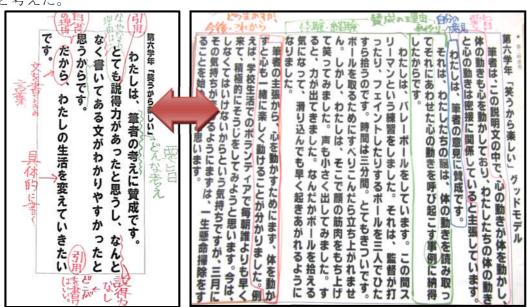
バッドモデル→単元で身に付けさせたい指導事項を含まないモデル グッドモデル→単元で身に付けさせたい指導事項を含んだモデル

イ バッドモデルを活用し「表現の曖昧さ」に気付かせる工夫

これまでの授業では、導入から教材文を使って、書く内容や表現を考えさせてきたが、書く活動の必要性を感じることができなかったり、自分たちが実際に意見文を書くときに、何を書くとよいのか悩む姿があったりした。そこで、第一次でバッドモデルを提示し、読み手が分かりにくいこと、改善すべき内容、具体性に欠けることに気付き、説得力のある文章を書くためには、どんな内容を書けばよいのかが理解できる指導を行った。

ウ グッドモデルを活用し「書くための視点」に気付かせる工夫

バッドモデルの活用から、子どもたちは、指導事項の「引用を入れるといい」「自分の考えを明確にして書くべき」「筆者の意見や要旨をまとめ、自分の考えと比べるといい」等と気付くことができた。そこで、グッドモデルを活用して、説明の仕方の工夫を見つけることにつなげ、グッドモデルを通して、「書くための視点(指導事項)」に気付かせ、意見文を書くときの課題を明確にすることにつながると考えた。



バッドモデル

【バッドモデルの効果】

- ① 書き手の考えについて自分の 考えをもつことができる。
- ② 表現の曖昧さから具体的に 説得力のある内容を書く必要 性を考えることができる。
- ③ 文を書く事が苦手な子も曖昧な文章を実感し,何をどのように書くのか理解して自信をもつことができる。

グッドモデル

【グッドモデルの効果】

- 事き手の考えの中心,根拠,事 例など,どのように書くとよいか 考えることができる。
- ② 書く視点をはっきりさせて教材 文を読むことで、教材文の読み取 りに生かすことができる。
- ③ 書く視点や文章構成を明確できるので、交流や内容の再構成に生かすことができる。

2 仮説2に関する主な取組

(1) ノート指導の充実

ア ノートの役割と機能について

ノートの役割や機能として,「練習」「記録」「思考」の三つが考えられる。 そこで,以下のように整理した。

練習	学習を通して,平仮名・片仮名・漢字を覚え,言葉や文を読 んだり書いたりするだけでなく,習得させ。
記録	授業の大事なポイントを忘れにくくしたり、授業後に想起さ
百८ 亚米	せたりする。
H 7	自分の考えをノートに書くことで、整理したり再構築したり
思考	する。

学びの場として,ノートはとても大切であり,ノート指導の充実を図ることで, 表現する力を高めることができると考える。

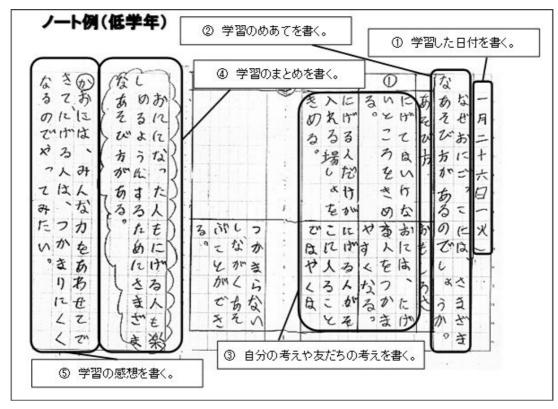
また、ノートとワークシートを比較したとき、ノートの方が自由に活用することができるので、自分で考え、まとめるという力が必要となる。ワークシートとノート、それぞれのよさを考えながら、子どもたちが主体的に表現する力を身に付けていけるようにするために、ノート指導のポイントを明確にする必要があると考えた。以下に、ノート指導のポイントとその実際を示す。

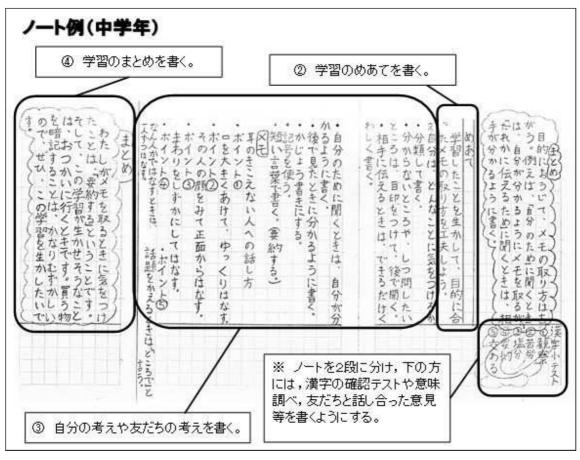
【指導のポイント】

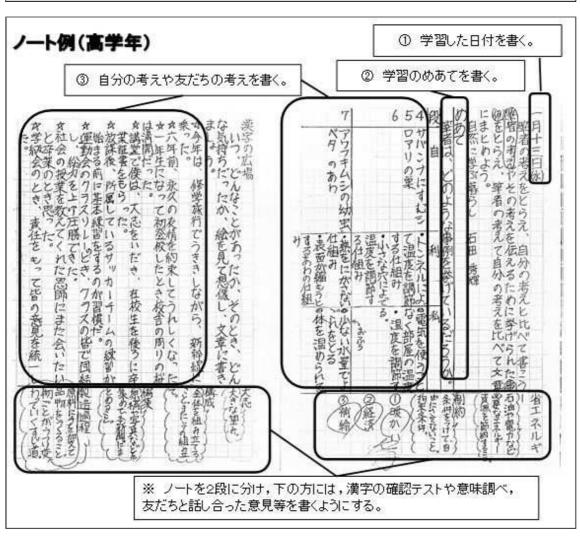
- ☆① 学習した日付を書く。
- ☆② 学習のめあてを書く。(両端に線を引く)
- ☆③ 自分の考えや友だちの考えを書く。
- ☆④ 学習のまとめを書く。
 - ⑤ 学習の感想を書く。

☆印は、授業で 必ず書かせる項目

ノートを2段に分け、下の方には、漢字の確認テストや意味調べ、友だちと話し合った意見等を書くようにする。それに伴い、ノートは算数等と同じように方眼ノートを横開きで使用する。 低学年では、国語ノートを使用するため上下に分けることはせずに使用する。



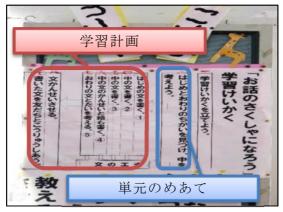


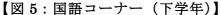


(2) 教室内外における言語環境の整備

ア 国語コーナーの活用

国語の授業で取り組んだ言語活動を通して出来た作品や学習計画等を中心に掲示している。自分と友達の作品を比較させることで感じ方・考え方の違いに気付かせたり、教材に関する情報等を掲示することで国語学習に対する関心・意欲を高めたりできる設営を心がけている。







【図 6: 国語コーナー (上学年)】

イ 季節のことば掲示

四季の素晴らしさや自分の周りにある季節を感じさせ、それを表現する語彙力を高めるために、各学年の国語の教科書に掲載されている春・夏・秋・冬の季節の言葉のページを拡大コピーし、学年掲示板に俳句など子どもの作品と一緒に紹介している。



【図7:季節のことば(下学年)】



【図8:季節のことば(上学年)】

(3) 語彙表の作成と活用

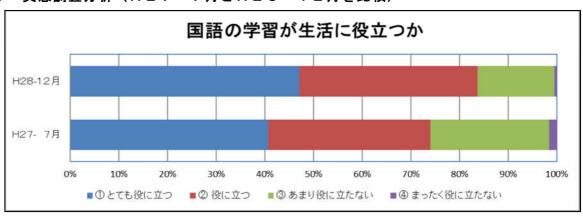
教科書上巻末にある「ことばのたからばこ」を生活の中で自分なりに使わせるために、教科書の上・下の巻末に貼った語彙表に書き込ませることで、語彙力を高められるようにしている。「どんな人物かを表す言葉」や「どんな物や事がらかを表す言葉」等を、教師が毎時間数個ずつ見つけさせたり、子ども自身が選んで見つけたりしている。また、集めた言葉を日記指導や短文作り等に生かして活用している。



【図9:語彙表】

Ⅳ 子どもの変容

1 実態調査分析(H27-7月とH28-12月を比較)



〇 国語の学習が役立つ理由

低学年	中学年	高学年
① 漢字を正しく書いたり、読	① 漢字を正しく書いたり,読んだり	① 漢字を正しく書いたり,読んだり
んだりすることができる	することができる	することができる
② 新聞や本をすらすら読むこ	② 将来の役に立つ(敬語,読み聞か	│② 将来の役に立つ(敬語,読み聞か │
とができる	せ,説明,文章を書く等)	せ、説明、文章を書く等)
③ 句読点やかぎの使い方が分	③ 新聞や本をすらすら読むことがで	③ 他の教科の文章や文章問題の読み
かる	きる	取り等,読む力が身に付く
7 -tt- 7		

【考察】

国語の学習に有用性を感じる子どもは、10%程度増加している。

低学年においては、漢字の入った文を読んだり、感想文を書いたりする活動が増えた。その中で、句読点やかぎなどを意識して読んだり書いたりしたことで、技能の高まりを感じている。このことで有用性を感じることにつながったと考えられる。

中学年においては、日常で使うことを意識して漢字を学習した。また、説明文を読んで要点をとらえたりまとめたりしたことが、新聞や本を読む際に活用され、その有用性を感じることにつながったと考えられる。

高学年においては、生活の中で漢字や難しい意味の言葉、長文に接することが多く、 分からないと困るという意識をもっている子どもが多い。また、他教科において、文章を読み取る活動や漢字を使って文章を書く活動を増やしたことから、有用性を感じる子どもが増えたことが考えられる。

2 諸学力検査の結果

国語科における各種調査(鹿児島学習定着度調査,全国学力・学習状況調査)において,本校では,以下のような結果となった。

(1) 鹿児島学習定着度調査の通過率:国語 ※()内の数値は県比

H 2 6	H 2 7		
59.6(-2.5)	70.0(+8.7)		

H26とH27を比較すると,約10ポイント上がっている。

(2) 全国学力・学習状況調査の通過率

※()内の数値は全国比

ア 国語A(基礎・基本)

H 2 6	H 2 7	H 2 8	
74.5 (+1.6)	66.2 (-3.8)	76.0 (+3.1)	

イ 国語B(活用)

H 2 6	H 2 7	H 2 8	
57.0 (+1.5)	67.1(+1.7)	64.3 (+6.5)	

ウ 読むことの領域

国語	吾 A	国語B		
H 2 7	H 2 8	H 2 7	H 2 8	
53.5	81.3	68.4	72.4	
(-1.7)	(+2.8)	(+0.3)	(+3.1)	

国語Aは3か年のうち2か年、国語Bは3か年全てにおいて全国平均を上回っている。H27とH28を比較すると、国語A・国語Bともに5ポイント程度上がっている。「読むこと」の領域においても、国語A・国語Bともに3ポイント程度上がっている。

V 研究の成果と課題

1 研究の成果

【仮説1】

- プランニングシートがあることで、意識すべき指導事項や授業の進め方をより明確にすることができ、子どもの「学び」をつなぐことができた。
- 言語活動のモデルをもとに、単元を通した学びを子どもたちも理解して、「何を」 読み取ればよいのか見通しをもって主体的に学習を進めるようになり、学習意欲の 向上が見られた。
- 発達の段階に応じた交流活動を設定したことで、「何を」「どのように」交流させるのか、明確な視点をもって交流させることができるようになった。

【仮説2】

- ノート指導を充実させることによって、自分の考えを書いたり、再構築したりできるようになってきた。
- 教室内外における言語環境を整備したことで、子どもの表現力を高めたり、これ までに身に付けた指導事項を意識して活動に取り組めたりできた。
- 語彙表を作成する活動を通して、子どものことばへの興味・関心を高め、語彙力 や言語感覚を育成することができた。

2 今後の課題

- これまでに作成したプランニングシートには、原稿用紙を使って意見文を書く等、子どもに過度な負荷がかかる言語活動が設定されているものもあったため、子どもの個々の実態を考慮した言語活動を設定して指導事項を確実に身に付けさせていく必要がある。
- 交流後の振り返りが十分でないために、これまでの交流活動では、交流を通して どんな力が身に付いたのかをはっきり意識できていないという課題があったため、 国語で身に付けた交流の進め方を他の教科でも生かしたり、交流の振り返りを充実 させたりして、さらに自分の考えが広がり・深まり・高まるような交流活動にして いく必要がある。

Ⅵ まとめ

研究を始める前は、指導事項を意識せずに言語活動を設定した授業をしたり、教師の 指示した通りに展開される授業をしたりしていた。そのため、教師によって指導法もば らばらで、「学び」のつながりのない授業だったと言える。

しかし、研究を進めるに従って、学習指導要領をもとに指導事項を確認してから、指導事項を身に付けさせるのにふさわしい言語活動を設定するようになってきた。その上で、この指導事項をこの単元で取り扱う意味が確認され、学習の流れに必然性をもたせることができた。そのことは、子どもたちにとっても、「なぜ」「何のために」この学習をするのか、ということを納得させることにつながり、主体的に学ぼうとする姿が増えてきた。また、教師が言語活動のモデルをつくってみることで、どこにつまずきがあり、どれくらいの時間が必要なのか等、授業設計がしやすくなった。

このように、「指導事項」「言語活動」「学習計画」等が一枚の紙に凝縮された「プランニングシート」は、研究を進める中で生まれた財産だと言える。ただし、「プランニングシート」は完成されたものではなく、子どもの実態や実際の授業等を通して練り直されていくものである。具体的には、「言語活動のモデル」を効果的に活用できていたか、自分の考えを深めさせる交流活動を設定できていたのか等、改善の余地は十分にあるということである。

そして、今後は、言語活動を行ったという達成感のみで学習が終わらぬようにして、 子どもたちがこの活動を通して身に付けた力を自覚できるような振り返りや評価の方法 について、研究を深めていきたい。